

団体名		フリースペースK (愛知県豊田市) http://www26.tok2.com/home/spacek/frame_main.htm	
団体の概要	活動開始年	西暦 1986年 9月 活動開始	
	メンバー	人数	<事務局スタッフ数> 5名 <その他> ミニコミ購読者、教室その他利用者約 200名
		構成	主婦が中心
	予算規模	平成13年度概算 ・収入 ¥1,220,000 ・支出 ¥1,140,000	
団体の目的		世代、性別、その他を超えた交流の場、助け合いの場、たまり場、町の縁側をつくり提供することで、ひとりひとりが主人公となり、それぞれの可能性を追求していくことができるようにする。	

ボランティア活動の概要

「フリースペースK」という誰でも気軽に立ち寄れる「たまり場」的な場所を、古い長屋を借りて運営している活動である。友達や仲間の欲しい人、何かをしたい人、学びたい人、助け合いの必要な人、子育て・教育・その他の人間関係等の悩みのある人、将来の就労に向けたウォーミングアップをしたい人、自分の可能性を伸ばしたい人等、幼児から大人まで誰もが利用できる。

そこでは、ミニコミによる情報交換、ベビー用品その他の余剰品交換としてバザー、才能を磨く目的のための音楽関係者とのコンサート企画、読書会や映画会、手作り品バザー、コミュニケーションの仕方を学べるセルフラーニングの塾、保育士資格保有者などによる幼児教室、託児など、間口の広い活動を行っている。

事務局スタッフ(小額の有償ボランティア)は、自主事業の企画・運営、スペース開場中の窓口当番、スペースの貸し出しにかかる事務などを行っている。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

子育てをお互いに助け合い学びあいながら、社会と関わっていききたいというニーズを抱えている子育て真っ最中の母親たちの気持ちをくみ上げて、「この指とまれ」というグループを十数人の主婦でつくって活動を始めた。その背景には、母親や妻などといった役割だけでなく、個人としての可能性を追求していくことが重要であるという気持ちがあった。また、代表者自身も3人の子どもがおり、子どもを預けてまでしたい仕事はなかったが、「どこかに勤めるより何かを創り出したい」とワーカーズコレクティブ的な活動を考えつ

くに至った。そうしたきっかけで様々な活動をしてきた延長線上に「フリースペースK」がある。

立ち上げにあたって、周りの人たちにアンケートをとったところ、子どもを互いに預けて活動することに消極的な反応であったので、託児や簡単な家事を有償で助け合う仕組み（当時の労働省が婦人会を中心に委託したファミリー・サービス・クラブ事業）の一員として登録していたこともある。また、子連れで公民館を使用することに少々気をつかうこともあり、数年間はメンバー宅を開放して拠点としていた時期もあった。

その後、子どもの成長に伴い、スペースに集まる人の関心も変わってくるなかで活動も多様化し、メンバーの自宅から借家の長屋（6畳、4畳半、3畳の和室のふすまをはずしたワンルーム）に拠点を移して、現在の活動形態となった。

活用した支援

地域の新聞や情報誌に取り上げられたことで理解者も出てきて、公民館の自主グループとして登録できたので、そこでの設備を利用して、ミニコミ誌の印刷などの発行作業ができた。

今後の課題

あえてひとつの活動に絞らずに専門店化しない場として続け、いろいろなグループと緩やかなネットワークを作り、情報交換したり助け合ったりしていきたい。今後はより幅広い人達との交流をし、「たまり場・町の縁側」としての役割を充実させる。生涯教育の場としても充実させていきたい。

（団体代表者によるレポート、団体代表者へのヒアリング調査、団体資料より作成）

<フリースペースKの様子>



<事例のポイント> 「違いと出会う」場の提供」もボランティア活動

この団体が行っているのは「場の提供」という、新しいタイプのボランティア活動事例である。あえて活動内容の制限をせずに間口の広い体制をとることで、幼児から大人まで誰もが気軽に立ち寄れる場所となっている。このスペースで多様な世代、異なる考え方もつ人々が「出会う」ことをきっかけにして、リサイクルショップの開店や、子育てガイドの発行といった活動につながるなど、インキュベーション機能をも備わった活動となっている。

<事例のポイント> 利用者やボランティア等のニーズに柔軟に対応

～息の長い活動の秘訣～

利用者として多様な人が集まり、事務局スタッフと利用者とが協働して多様な企画を立ち上げて実現化している一方で、子どもの成長に伴って就職する利用者も多く、おおよそ数年間くらいでスペースから離れていくという。スペースを運営する事務局スタッフでは、それをマイナスに捉えることなく自然の流れと受け止めている。

ボランティア団体とはメンバー間の関係性の変化に応じて変化し続けるものであるが、この事例ではそうした変化を受け入れながら、常に新しい企画にもチャレンジしていくことで、20年間近くの長期的な活動を継続することができているといえよう。

<事例のポイント> 活動に光をあてることが、重要な支援

資金援助などの支援は受けていないものの、団体の活動を新聞や情報誌などが取り上げてくれることで、住民に広く周知されるとともに理解が得られ、活動内容をパワーアップさせている。

ボランティア団体を支援するにあたっては、この事例のように、団体が行っている活動の意義を見出してあげることも重要な役割である。ボランティア団体にとっては、第三者に活動を取りあげられることによって、活動が普及し利用者が増えるなどのメリットだけでなく、自分たちの活動を客観的に振り返ることができ、よりよい活動のあり方を模索していくきっかけになるものと考えられる。